

アジアIT標準化事情

平成17・18・19年度標準化関連事業
成果

2008-05-30

佐藤 敬幸—CICC

なぜ アジアのIT標準化事情か (目的)

(連携仲間づくり型目的)

- 国際標準化の世界で日本の存在感を増したい
- 日本発の国際標準を増やしたい
- 国際標準化活動において アジア諸国の賛同を得ることが重要
- 欧米主導の国際標準開発で、アジアが連携して、対等な立場で勝負したい

(市場調査・開発型目的)

- 国際標準にアジアの要求を、きちんと、反映させたい
- アジア諸国の、我が国にとって不都合な国家標準の開発を牽制したい

アジア諸国の、どこと、どのような交渉をすれば良いのか？

各国に専門家担当者の紹介を依頼したいが、それもどこに依頼すればよいか？

注： この目的が違うと、標準化事情情報が変わってくる

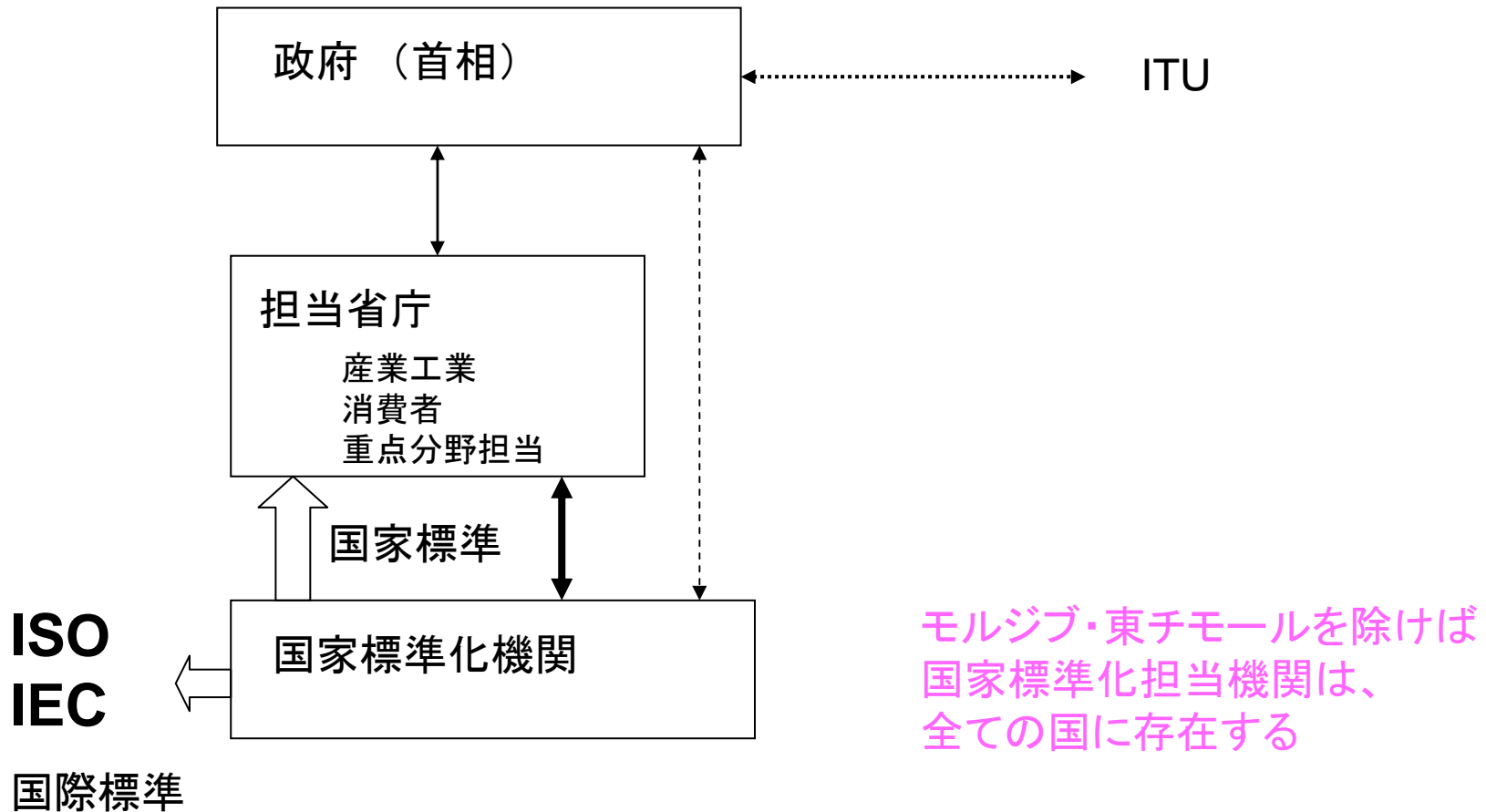
なぜIT標準化状況か？

- 公的国際標準化機関は、ISO, IEC、ITUなどある
- それぞれは 本体(ISO 等) > TC > SC > WG 構成
- ITは、ISOとIECの合同TC JTC1が担当
- JTC1の開発する標準はISOより多い
- ISOやIECと等価で独自の活動をすることが多い
- 実質 ISO IEC ITU JTC1が並存している

情報技術だけは特殊扱いをされる場合が多いので、
一般の標準化機関の活動から類推できない動きがある

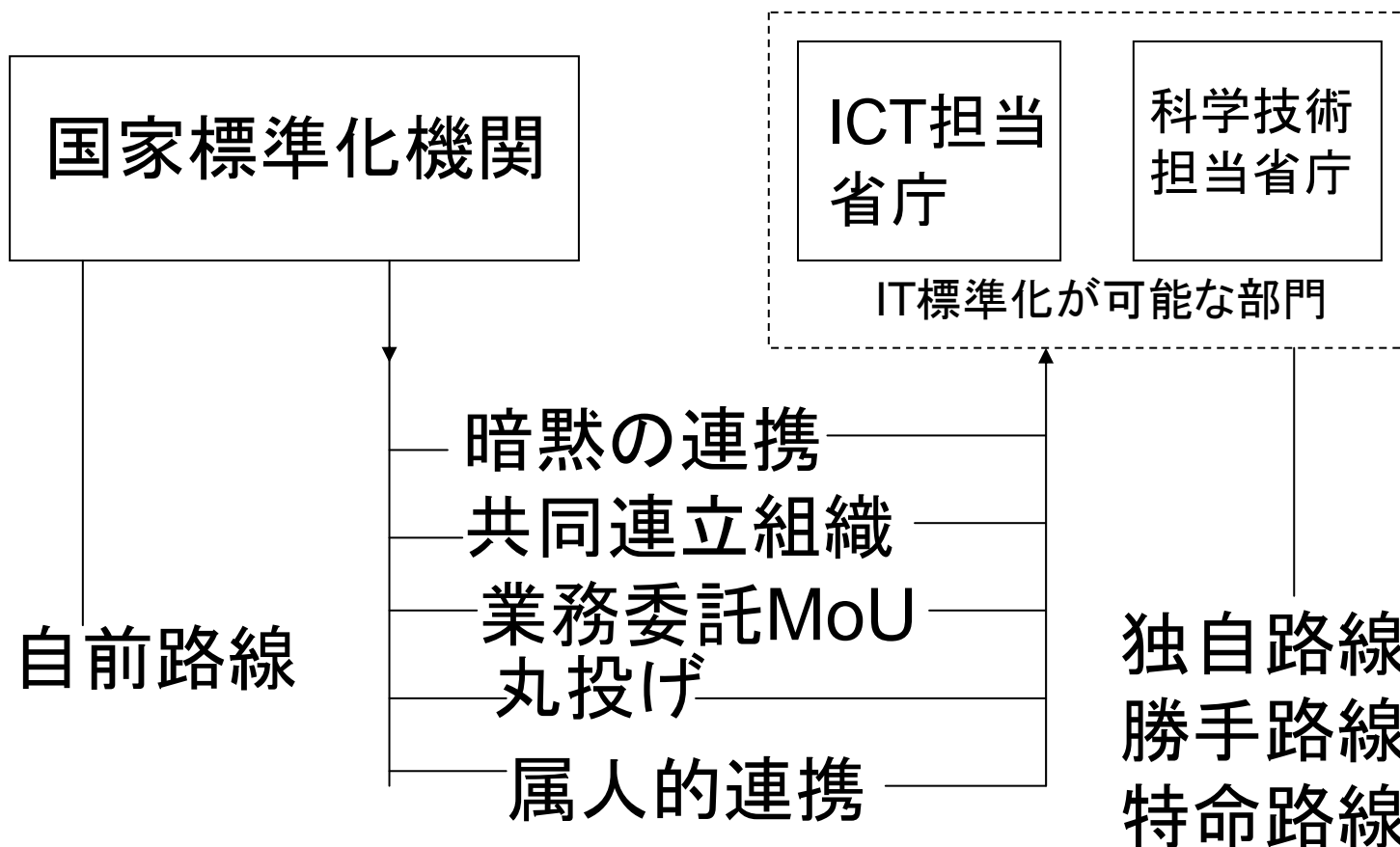
北東・東南・南アジア諸国は ISOメンバー国である

(例外は、モルジブ・東チモール)

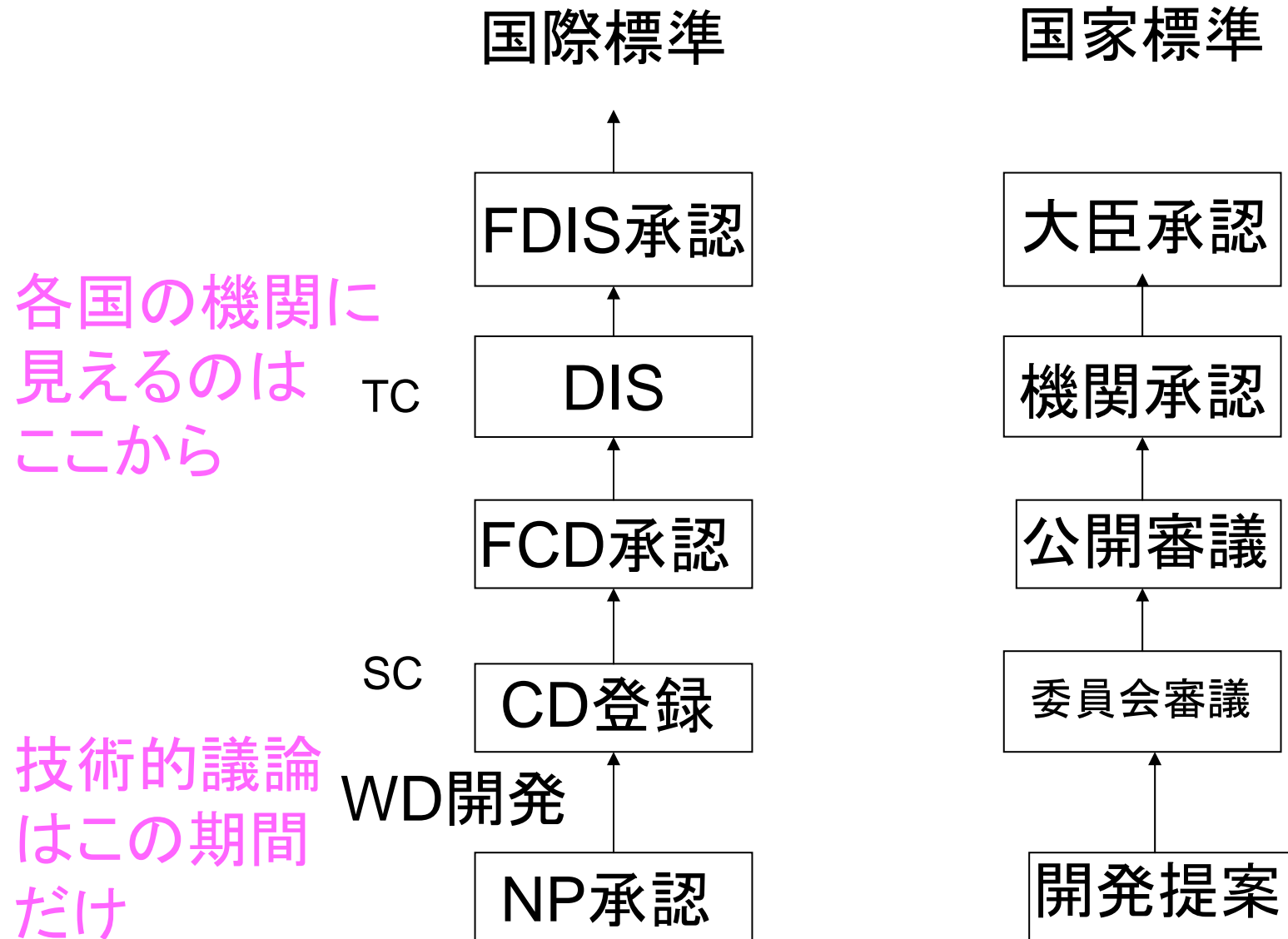


国家標準化機関はITを避ける場合が多い

ICT担当省庁などが実務を担う

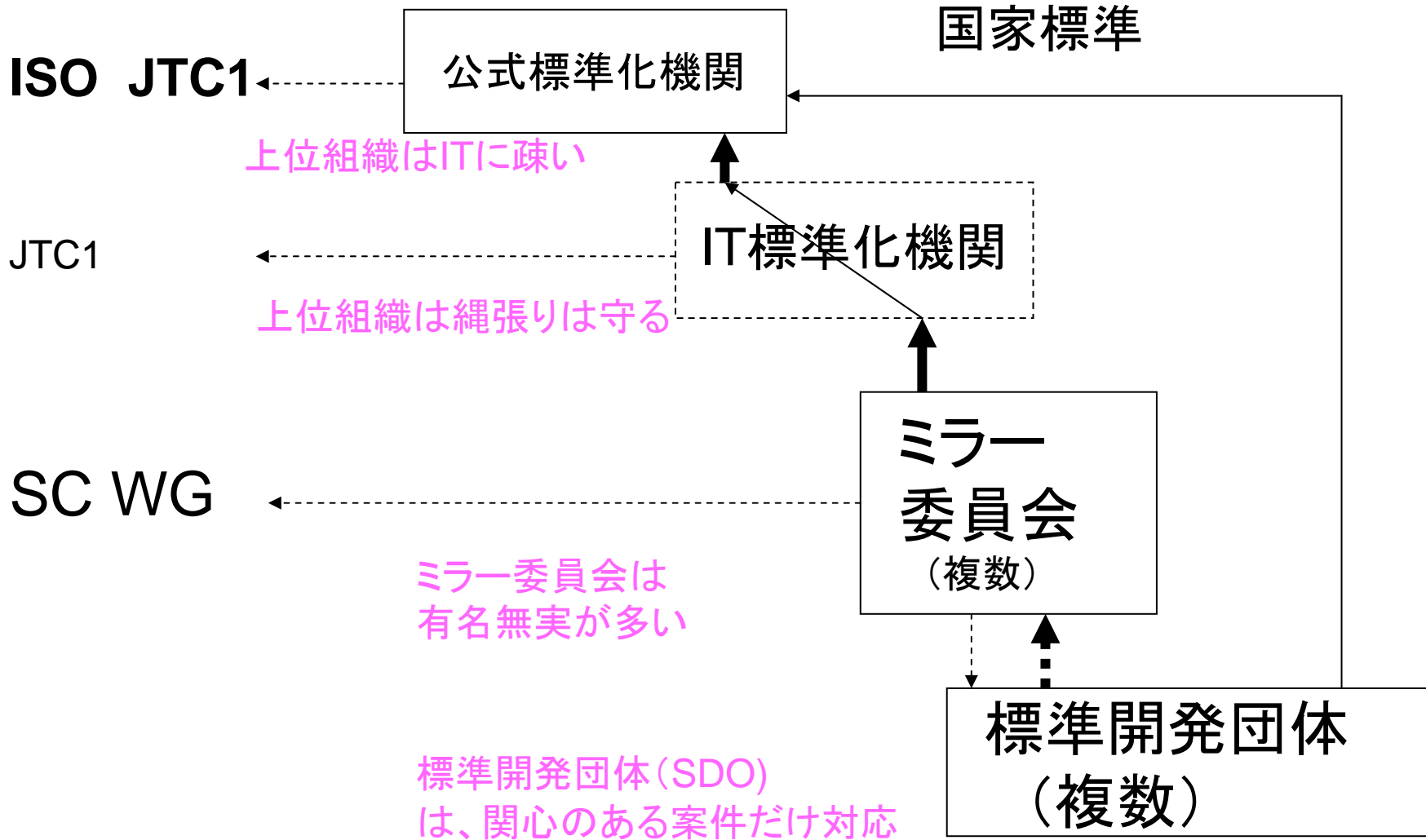


標準開発プロセス(参考)



国際対応と国内対応

国際機関



ミラー委員会

- 国際の実質審議に対応する委員会
- アジアでは、SCに参加していても、独立ミラーは無いことが多い 複数SC対応の素人集団であることが多い
- 実際は、臨時編成で、HODは、毎回異なる
- ミラーのChairですら不安定
- 消極参加か 眠りメンバー
- 実力部隊のSDOがある場合のみ、SDOの関心のあるテーマにのみ積極的に国際活動

SDO

- 関心のあるテーマにのみ積極活動
- 分野ごとに固定的SDOが決まっている国と自由に、その都度SDOを編成できる国がある この後者が問題の種
- 1国・1テーマ・1SDOならば問題ない
- SDOは、自己の関心のみで、国家標準原案を作成する傾向が強い

SDO

- 専門部隊制 常設型
- 機動部隊制 必要に応じて編成
- 群雄割拠ゲリラ戦
- 軍閥型の自称SDO
- 実力者の衝動のお墨付き

国家標準の国際整合

- どの国の国家標準化機関も、国際整合の重要性を認識していると言いき、そうしていると言いき
- だが、わが国の特殊事情がある部分だけはい変更している、とも必ず言いき
- 実際は、WTOのTBT協定の拡大解釈
- 現実はい、国際標準を下敷きにした独自標準

- SDOLレベルでは、国際協定よりは実利重視
- 産業系省庁は、自国産業保護にウエイトがある

- 結局国際不整合な 国家標準が出来やすい

中間的まとめ

- アジア諸国のIT標準化機関は、まだ標準開発機関としての活動はしていないし、期待するのは無理
- それは、構造的な原因も大きい
- 参考： とはいえアジアの協力を得なければいけない場面は、ITについては多くはない
- これらの人々から、どう情報を獲得し、どう協力を得るかが課題
- “仲良くしようねの七夕会議”は有効かどうか疑問
- 構造的に、連携協力の開発は困難

アジア諸国の標準化活動

では、アジアのIT標準化機関は
何をしているのだろうか？

アジアに於ける平均的標準化活動

- 標準化とはなにか
- 組織 と意思決定 （鹿鳴館型が多い）
- 国際活動
 - 参加
 - 公的標準とデファクト標準
 - 国際整合
- 標準化人材
- 三つの特徴ある地域 CJK 中進国 途上国
- 国際馴れ 援助馴れ

アジアにとって標準化とは？

- 統一して規制すること
- 購入規格との混同
- 技術的に唯一無二 正しい

- 輸出の条件
- 安価な(最新の)技術移転

- 勉強するもの(普及啓蒙)これが各国の活動
- 開発は先進国まかせ

標準化とは 選択である

標準は、互換性や安全性を向上させるか？

標準がないと、互換性や安全性が損なわれる
場合がある

ある課題に対して、誰でも答えが考えられて、
それが複数あると、世間が迷惑する
——標準が必要（不必要な標準が多い）

組織と意思決定

既述

鹿鳴館型に留意

国際活動

- 参加しても無駄と思っている
- 公的標準とデファクト標準の区別がつかない
- 国際統合は、輸出の条件で、国内に独自標準があっても何が悪い

標準化人材

- 当該技術の専門家は稀
- 多くの専門家と称するひとは、任命され、担当標準を勉強して、やっと建前を理解している人
- 新規提案や、相談相手としては不足
- 反対意見を期待してはいけない

三種類の地域

- CJK
- タイ・インド・シンガポール・マレーシア
- 途上国

国際慣れ

各国の自称関係者や担当者は多い

でも、本当は担当でない

しかし、知らないことでも話を合わせる

国際協力

- 各国には、応援団がついていることが多い
- この人たちは、自称天才で
- 標準をわかっていない
- 各国を、誤った方向に誘導しやすい
- 現地にも天才がいることがある(人材問題)

IT標準迷信集

- 標準を制するもの、市場制する
- 国際標準は欧州の国数が多いところの横暴に泣いている
- 日本は 遅れており 存在感がない
- P-memberを増やして日本の仲間づくり
- 各国の標準化機関は 日本を下敷きに見るとわかりやすい
- 各国の標準化機関は SDOである
- 各国の専門家との話し合いで 日本ファンが増える
- 国際標準戦略は進んでいる 問題に対応している

- CJKは利害を共有している
- 現地の人に聞けば情報を得られる

ほぼ結論

- アジアでの標準化活動は、日本での想定と異なる
- 国家標準化戦略をITに適用するのは困難
- でも、連携すればよいことが沢山あります

しかし、アジアとの連携は必須

- 相手の実態を想定して、適切に連携しよう
- 目的を明確に 連携は目的ではない
- 目的に合わせて 相手を手繰り寄せよう
一発で適切な相手は見つからない
- 気心の知れた仲間が必要
- 目的と相手に合わせて 方法を選ぼう

とりあえず、おわり